もっと知りたい！熊本市 KUMAMOTO CITY

まちづくり探検隊

ダイジェスト Vol.3

地域を元気にするキーパーソンの紹介

地域を活性化させるためには、まず、そこに暮らす人々が元気でなければ、まちづくりを前に進める活力は生まれません。そんなときに頼りになるのが、住民の先頭に立ってアイデアや情報を発信し、地域の“元気の源”として私たちを引っ張ってくれるキーパーソンの存在です！

＼聞かせて／ 地域の元気モン

2018年 5月25日号 掲載

今週の元気モン

池上校区ウォーターボーイズ
代表 大嶋（おおしま） 一生（かずお）さん

1981年、熊本市生まれ。幼少時代から池上校区で育ち、バスケットボールに明け暮れる毎日を過ごす。日本体育大に進学し、卒業後は家業を継ぐために帰熊。現在は3児の父親として、ミカン栽培の傍ら、池上小PTA副会長など、地域の役職も精力的にこなしている

私が話を聞きました！

地域活動には関心があるんですがどうやって溶け込んでいけばいいのかが分からなくて…

探検隊メンバー 池田史恵さん

校区の魅力を子どもたちに伝えたい！

Q1 「池上校区ウォーターボーイズ」誕生のきっかけは？

生まれ育った故郷への恩返し

私が子どもの頃は大勢の人でにぎわっていた高橋西神社の夏祭り。帰郷して久しぶりに出かけたら、高齢者と子どもの姿しかなくて…。そこで、「地域を盛り上げたい」という思いから、2002年の夏祭りで「ウォーターボーイズ」のダンスを披露したのが活動の始まりです。当初は「自分たちが楽しめれば」との思いが強かったのですが、皆さんが想像以上に大笑いしてくれたので、「来年はもっと笑わせたい」という気持ちが芽生え、現在に至っています。海パン姿で踊るウォーターボーイズだけでなく、その時、流行している歌に合わせて仮装ダンスを披露したりもします。活動を通じて地域に笑顔を届けるのが私たちの使命です。今でも活動の中心は夏祭りですが、

▲農家や会社員、介護士など、メンバーの職業はバラエティー豊か。昨年は「恋ダンス」を披露するなど、流行も取り入れています

Q3 仕事と地域活動を両立するコツは何ですか？

“できる人ができたしこ”が両立の秘けつ

私はミカン農家を営んでおり、質の高い商品を提供するためには、年間を通して丁寧な作業が必要です。もちろん、仕事と地域活動を両立させる難しさを感じる場面はあります。しかし、“できる人ができたしこ”を合言葉に、他のメンバーと支え合って活動しています。イベント前は週1～2回集まり、約30分の練習後、約3時間の飲み会(笑)。そこで語り合って思いを共有することで、メンバーが同じ方向を向いて活動できているのが、成功の秘けつかもしれません。読者の皆さんも、肩肘張らずにお住まいの地域の活動に気軽に参加してほしいですね。

Q2 活動を始めたことで、地域に何か変化は起こりましたか？

30～40代の働き盛り世代が地域活動に積極参加

最近では、私たちが楽しみながら活動しているのを見て、地域の30～40代の方々が「面白そう」「お手伝いしますよ」などと声を掛けてくれ、子どもの学校行事だけでなく、地域活動にも少しずつ参加してくれるようになりました。おかげで行事の準備や片付けが以前より短時間で終わるようになりましたし、自治協議会の先輩たちとの関わりを持ついい機会にもなっています。また、子どもたちにも地域活動を通じて楽しい思い出を作ってもらい、「大人になってもここに住みたい」と思ってほしいですね。

取材を終えて

既存の団体とは異なる新たなコミュニティーを作り、地域のみんなを楽しませる。そんな元気な大人の背中を見た子どもたちが、地域に愛着を持って育っていく姿が想像できます。「もしかしたら私の地域にもこんな活動をされている方がいらっしゃるかも」と思い、探してみたくなりました。 池田さん

池上校区ウォーターボーイズ

2002年に結成。西区の上高橋地区に住む30～40代のメンバーが中心になり、踊りで地域を盛り上げたいと活動を続けています。

主な活動 / 毎年7月に開催される高橋西神社での夏祭り

元気モンの格言

自分自身が楽しむ。一歩踏み出して

聞かせて 地域の元気モン

2018年10月12日号掲載

今週の元気モン

隈庄校区自治協議会
会長 **上田 恵美子**さん

1958年、熊本市生まれ。結婚後、89年に旧城南町に引っ越し、以降、さまざまな地域活動やまちおこしに関わり、98年から同町議を11年間務める。現在も、小学校の学級支援員として働く傍ら、隈庄校区青少年健全育成協議会会長、城南火の君太鼓名誉会長など地域で多数の役職に就く。夫と長男、母の4人暮らし。

▲隈庄校区自治協の大きな仕事の一つ「コミセン夏祭り」(8月開催)。地域の若い世代も積極的に関わり、地域一丸で準備に当たります

私が話を聞きました！

同年代の働く女性が、どんなふうに地域の"まとめ役"をしているのかが、とっても気になります！

探検隊メンバー
高見睦代さん

若い人たちが住みたくなる地域にするため文化活動の充実や後進の育成にも力を注ぎます！

"地域の元気モン"として城南地域を盛り上げる上田さん

今や城南町を代表する伝統芸能グループとなった「城南火の君太鼓」の立ち上げを皮切りに、さまざまな地域活動に携わってきた上田さん。昨年は、長年途絶えていた地元の獅子舞復活にも尽力しました。また、城南地域の魅力を多くの人に知ってもらおうと集まった若手有志の会「城南地域ブランド力向上検討委員会(通称：チーム城南ワンダホー)」のアドバイザーとして、地域を担う後進の育成にも力を注いでいます。

▲定期公演はもちろん、全国大会でも優秀な成績を収めている「城南火の君太鼓」。海外公演の経験も！

取材を終えて

私とほぼ同年代の上田さんが、「仕事や家事と地域活動を、どう両立しているのだろう？」と不思議でした。でも、周囲の協力を得ながら地域運営や行事の準備を進めていると聞き、「もっと早く、こんなすてきな女性に会いたかった！」と思いました。現在は、まちおこしに関わる若手育成も手掛けているそうですが、きっと上田さんの背中を見て、城南町の次代を担う後進が育つと思います。 **高見さん**

Q1 上田さんが地域活動に携わるようになった、きっかけは？

太鼓チーム結成を機に地域とつながる

30年ほど前に城南町に移り住み、子どもたちを連れて地域の夏祭りに行きました。その時、「祭りで太鼓の音がしないのは寂しいな」と思い、今の「火の君太鼓」の前身となる太鼓チームの結成を呼び掛けたのが始まりでした。そこでメンバー集めや練習場所探しなどを通して地域とのつながりができたことがきっかけとなり、校区の青少年健全育成協議会や自治会などの活動に関わるようになりました。

Q2 校区をまとめる「校区自治協議会長」は大変では？

副会長の協力も得ながら仕事や家庭と両立

校区自治協議会は、町内自治会をはじめ、校区内の各種団体で構成されているので、ヨコの連絡・調整などは大変です。また、昼間は小学校の学級支援員の仕事をしており、校区自治協の打ち合わせや会議などに出席できないこともあります。そんなときは2人の副会長にもサポートしてもらっています。だから、隈庄校区は私一人が会長ではなく、「3人で一人の会長」なんです(笑)。また、夜も地域の集まりなどが多いのですが、家族の食事の準備だけは必ずしていくようにしています。

Q3 今後の校区運営で取り組みたいことなどは？

増加する子どもたちのために文化的な活動も

隈庄校区は宅地化が進み、小学校の児童数も年々増えているので、子どもたちや子どもを育てる若い親たちが住みたくなる地域にしたい。その一つとして、地域の文化活動に力を注ぎたいと思っています。具体的には、演劇サークルをつくり、そこで子どもミュージカルなどができたらいいですね。校区のキャッチフレーズである「隈庄は古きも新しきも交じり合い、明るく会話が弾むまち」にするためにも、皆さんの協力を得ながら頑張っていきます。

元気モンの格言

自分が地域で楽しく過ごしたいから頑張れる

聞かせて 地域の元気モン

2018年8月31日号掲載

◀心肺蘇生法では、「反応・呼吸の確認」「協力者を求める」など、一連の流れをグループごとに学びます

今週の元気モン

「防災キャンプ」を企画した
託麻原小学校PTA
会長 **漆野 和也**さん

1977年、熊本市生まれ。大学卒業後、熊本市消防局に入局。出水出張所所長、救急隊隊長、特別救助隊副隊長などを経て、現在は東区役所総務企画課で防災担当を務める。1男1女の父として、託麻原小PTA会長を4年務め、今年初めて、防災キャンプを企画。

私たちが話を聞きました！

「防災訓練」や「避難訓練」と何が違うの？

心肺蘇生やAED装着は初体験なので緊張します(汗)

探検隊メンバー
フェレロ恵美さん
フェレロ善明ジャノくん

探検隊メンバー
森崎友裕さん

親子で防災の大切さを学び災害に強い町づくりを目指しています！

探検隊メンバーもキャンプに参加さまざまな防災・救命活動を体験！

昨年7月21日・22日に託麻原小で実施された「防災キャンプ」。初日の体験型防災学習の時間に探検隊メンバーも参加。心肺蘇生法やAED取り扱いを学んだほか、応急担架も作成しました。キャンプでは、他にも着衣水泳や水消火器取り扱い、起震車乗車などさまざまな体験プログラムが実施され、夕・朝食は災害時の非常食を調理。キャンプを通じて、子どもたちは防災について実践的に学びました。

◀竹と毛布で応急担架を作成。正しく毛布を折れば、大人を運ぶこともできます

◀初めは普段、着衣では入れないプールにて興奮気味の子どもたち。しかし、徐々に「動きにくい」「寒い」と着衣水泳の難しさを体感

取材を終えて

防災キャンプでの経験を生かし、災害時に"助けられる人"から"助ける人"になりたいと思いました。 **森崎さん**

防災キャンプを全国に広げてほしいですね。私は、この経験を次の世代へ伝えていきたいと思います。 **フェレロさん**

Q1 「防災キャンプ」を実施した目的は何ですか？

子どもの時の学び、経験が将来の担い手育成に

まず、熊本地震を風化させないこと。次に、子どもたちが、防災の知識や情報を学び、集団生活をすることで自らの安全を守るだけでなく、自助・共助の大切さを感じてほしい。キャンプでの経験や学びが、将来の地域防災を担う人材育成につながればと思っています。

Q2 PTAが主催して「防災キャンプ」に取り組もうと思ったきっかけは？

子どもが親に伝えることで防災意識に変化

各自治体が主催する「防災キャンプ」もありますが、各学校から少人数で参加することが多く、子どもたちも少し緊張しがち。日頃から顔なじみの先生や保護者、友達と一緒ならリラックスできて、情報も頭の中に入りやすいと思います。今回は5、6年生43人が参加しました。彼らが学んだことを家庭で話せば、親の意識も変わり、「災害に強い街づくり」の底上げにつながると考えています。また、PTA会長として、消防士というスキルを生かし、地域に恩返しをしたいというのも理由の一つです。

Q3 「防災キャンプ」を開催して感じたことや今後についての思いは？

熊本市全域に防災の輪を広げたい

防災意識の向上に近道はなく、地道に継続していくことが大事。託麻原校区だけでなく、熊本市92校区4地区すべてに、この輪を広げていきたいですね。内容が違っても構わないと思います。各校区PTAが、保護者のスキルや得意分野を生かしたプログラムを企画・実施すれば、負担も軽く継続も可能です。地域活動で大切なのは、「頑張り過ぎない」こと。校区自治協議会等とも連携して、「みんながちょっとずつ」できる環境をつくっていくことが大切です。

元気モンの格言

自分の得意分野を生かし地域活動を継続